着彩写真に関する研究ー植木昇を例として

◎白岩洋子（白岩修復工房）山口孝子（東京都写真美術館）塚田全彦（東京藝術大学）

はじめに

東京都写真美術館に所蔵されている植木昇の作品の中には30点以上の着彩写真がある。全てゼラチンシルバープリントに着彩されており、カラー写真が普及する前の1940年代後半から50年代に制作されている。それらの作品に塗布されている色材や技法の解明を目的とした調査の結果を報告する。

植木昇と着彩写真について

植木昇は広島生まれ。22歳で京都の河野龍太郎写真場に修正師見習いとして入門する。1934年には独立して写真館を開館。営業写真家として仕事をしながら、K.P.S.（キョウト・ホト・ソサエテ、1925年設立）のメンバーとして活動の場を広げた。その後「虹」の写真グループにも所属しており芸術写真の制作を続けた。植木の作品は当時の写真雑誌に掲載されているものはあるが、着彩に関する情報はない。

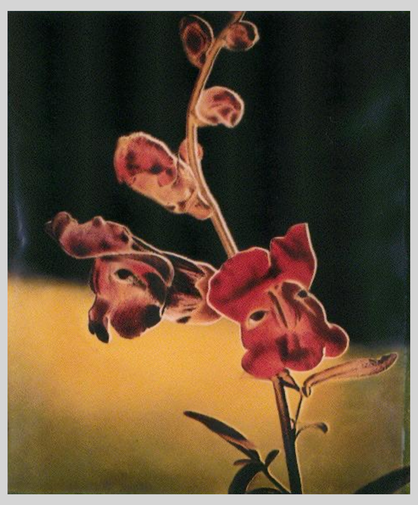
植木昇の着彩写真の特徴

- ゼラチンシルバープリント（バライタ紙、印画紙の種類は様々）
- サイズ（± 56 x 45 cmのものが多い）
- 全体に着彩されている作品が多い
- 抽象的な表現の作品が多い

植木昇　着彩写真

東京都写真美術館所蔵

A (作品番号10007668)



B (作品番号10007671)

C (作品番号10007663)

D (作品番号30107241)

E (作品番号30107505)

F (作品番号10007661)

G (作品番号10007672)

＊作品番号=東京都写真美術館収蔵品作品番号

印画紙と着彩技法

植木は着彩写真に数種類の印画紙を使用していた。作品の裏面情報（本人の記述）や出版物からの情報をまとめると以下の印画紙の使用が確認できた。印画紙によって着彩の表現も異なる。

作品名	印画紙	販売元	特徴	掲載誌
地球上に於ける架空の風景	八重G	六桜社	微粒面 厚手、微光沢	東京都写真美術館蔵 （作品裏面に記載あり）
人間擬態	染井GS	六桜社	微粒面 厚手、微光沢	フォトグラフィ 1950.2
球体の擧動	染井FS	六桜社	光沢面、薄手	フォトグラフィ 1950.6
大いなるオブゼ	ベロナ F2	富士	光沢面、薄手	アルス写真年鑑1950
写真造型・木目	月光 V2	三菱	光沢面、薄手	アルス写真年鑑1951

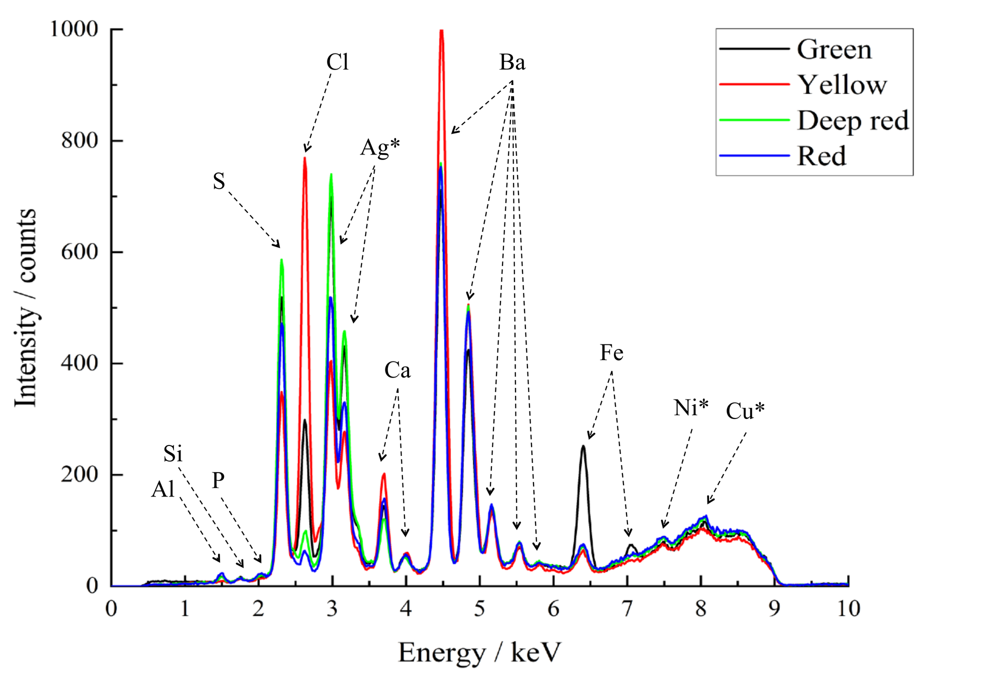
微粒面のある厚手の印画紙。一見すると写真かどうかわかりにくい。絵具が凹部に入り込んでいる。絵具を一度塗った上で拭き取りながら色の濃淡を表現している。
（左図作品C）

滑らかな表面の薄手の印画紙。絵具は染み込んでいるように見える。着彩してない部分もあるが全体として不自然さは感じられない。
（左図作品E）

色材の調査

色材を推定する目的で非破壊分析調査を行なった。XRF分析計（Thermo Niton XL3t）及びポータブルFT-IR 分光光度計 （Bruker Alpha、外部反射モード）を使用した。目視で着彩形式や印画紙の種類が異なる作品を選択し、各作品上の数箇所を測定した。

作品番号	XRFによる主な検出元素	測定箇所の色	FTIRの結果と併せて推定できる材料	備考
A（10007668）	Ba, S, Fe, Cl, Ca	黄	ハンザ・イエロー、油（？）	
		緑	プルシアンブルー＋ハンザ・イエロー、油（？）	
		赤	アリザリン・クリムゾン 油（？）	
B（10007671）	Ba, S, Fe, Cl, Ca	赤・黒	硫酸バリウム、油（？）	顔料等の情報は得られなかった
C（10007663）	Ba, S, Fe, Cl, Ca, Pb	茶・赤 黄	硫酸バリウム、油（？）	黄、茶にクロムイエローを含む可能性（XRFでのPbの検出からの推測）
D（30107241）	Ba, S, Ca, Fe	黒・桃	硫酸バリウム、タンパク質	タンパク質はプリント由来の可能性 顔料等の情報は得られなかった
	Ba, S, Ca, Fe, Pb, Cr	黄・橙	油（？）	黄、橙色にクロムイエローを含む可能性（FTIRでは検出されず）
	Ba, S, Ca, Fe, Pb, Si	緑	油（？）	顔料等の情報は得られなかった
E（30107505）	Ba, S, Fe, Cl, Ca	黄・白 褐色	硫酸バリウム、タンパク質	タンパク質はプリント由来の可能性 顔料等の情報は得られなかった
G（10007672）	Ba, S, Fe, Cl, Ca	黄	ハンザ・イエロー、油（？）	タンパク質はプリント由来の可能性
		緑・黒	プルシアンブルー、タンパク質 油（？）	



*: Elements from the instrument

XRF Results of A (作品番号10007668)

おわりに

色材に関しての調査では色材に由来すると考えられる元素はほとんど検出できなかったが、メディウムに関してはFT-IRで乾性油に由来すると思われる吸収がいくつかの作品で観測され、油性メディウムの色材の使用が示唆された。層の構造を持つ写真印画紙上に絵具が薄く塗布されていること、色材やメディウムの経年劣化から判定への影響があったと思われる。植木は印画修正、ブロムオイル、雑巾掛け（プリントに油絵具を塗り、拭き取りながら画像を作り上げる日本独自の方法）の経験も豊富であり、それらのテクニックを駆使しつつ、入手が容易だった絵具を使用して完成度の高い着彩写真を制作したと推測できる。